

# 人間性の探究

## 第4回

### 東インド会社とアジアの海①

#### 2020年度前期

1

#### 本日の内容に入る前に...

##### \* 第1回分のレポートの感想・疑問点を受けての補足説明

Q1：植民地支配をすることで資源や労働力を得るなどメリットは多くあると思うが、ヨーロッパやアメリカと東南アジアの距離を移動してまで支配する必要があったのか

- ・初期の香辛料貿易や使役による莫大な利益(19世紀蘭領東インドの強制栽培制度など)

※ただし状況によっては赤字経営も

- ・中国との貿易の中継地としての意義（とくにイギリスによる茶貿易）
- ・産業革命後のヨーロッパ製品の原料供給地および市場としての意義
- ・ヨーロッパによる啓蒙・文明化思想、勢力拡大による国家の威信の誇示

Q2：タイはなぜ植民地化されなかったのか

- ・地理的要因（フランスとイギリスの緩衝帯として。独立は保ったが一部領土は割譲）
- ・外交戦略（英仏と通商条約締結し自由貿易体制をつくる）
- ・ラーマ4世・5世による近代化政策（西洋式教育の導入※や司法制度改革などを通して近代的な中央集権国家を樹立）

※映画「王様と私」(1956) = 1860年代のシャムが舞台。イギリス人家庭教師アンナとタイ王族との交流を描く

2

## はじめに

### \* 歴史の捉え方：どのように歴史を記述/理解するのか？

#### <様々な歴史の記述の仕方>

- ・「国史」(National History)…ex.日本史、英国史  
     ※「地域史」「地方史」「郷土史」(Local/Regional History)
- ・「世界史」(World History)…西洋史(←万国史)+東洋史※(←中国史)

### ⇔「グローバル・ヒストリー」(Global History)

…2000年代以降、欧米諸国を中心に広がりつつある研究手法/歴史観

…「新しい歴史」？

3

3

### \* 「グローバル・ヒストリー」の特徴

#### ①扱う時間が長い

…数世紀にわたる長期的な歴史動向、時には人類の誕生や宇宙の誕生も含める

#### ②対象とする空間が広い

…「ユーラシア大陸」「インド洋世界」など

#### ③対象とするテーマが幅広い

…生態系・環境の変容、疫病、人口動態、商人のネットワーク、奴隷貿易、人・モノの移動など(⇔ 従来の歴史学：戦争、政治、経済、宗教など限定的)

#### ④異なる地域間の相互関係の重視

…あるモノや制度を通じて、諸地域がどのように連関した歴史的動きを見せたかなど

#### ⑤ヨーロッパを中心とする歴史記述の見直し

…「西洋＝先進」という見方への批判、世界史における西洋の役割の過大評価への批判

4

## \* 「グローバル・ヒストリー」の立場からみた従来の世界史の問題点

### ・ 国民国家を単位とした歴史の重視

…一国内の「縦の歴史」が重視され、「世界史」とはいつても、実際には国あるいは地域単位の寄せ集めにすぎない

### ・ 「世界史」から日本を除外する傾向 (とくに世界史教育)

・ グローバル化の急速な進展に伴って生じる現代社会の諸問題に対して、問題提起できるような関心や問題意識をもたない

…環境破壊や地球温暖化、労働力移動と移民、経済構造の変容、アジア諸国のめざましい経済発展、伝統的な価値観の揺らぎとハイブリッドな文化の登場など

→「グローバル・ヒストリー」の視点は、高校世界史教科書にも取り入れられる傾向

### ※本授業の視点：

大航海時代の到来による世界の一体化とともに登場した**東インド会社**と、その時代に世界の商品流通の中心となった**アジアの海**を通して歴史を考える

5

5

## \* 大航海時代(Age of Discovery/Age of Exploration)のはじまり

- ・ ヨーロッパ人の航海と探検により、全世界が一つになる発端が現れた時代
- ・ ポルトガルとスペインを先頭に開始

### = 「世界史の一体化」の時代

⇔それ以前は地域限定的(地中海のイタリア人、北海のドイツ人、インド洋のイスラーム商人、鄭和の南洋派遣など)

※ただし近年では、ヨーロッパの覇権以前にも一つの世界システムが存在していたとする説もあり(アブー・ルゴド)

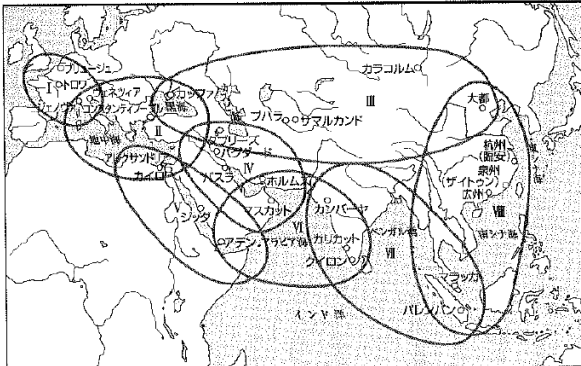
- ・ 広義には、15世紀末から17世紀中頃まで
- ・ 狭義には、1415年(ポルトガルによるセウタ攻略)～1522年(マゼランとエルカーノによる世界一周航海が完結)とする説もあり
- ・ 以前は「地理上の発見の時代」と呼ばれていた

6

6

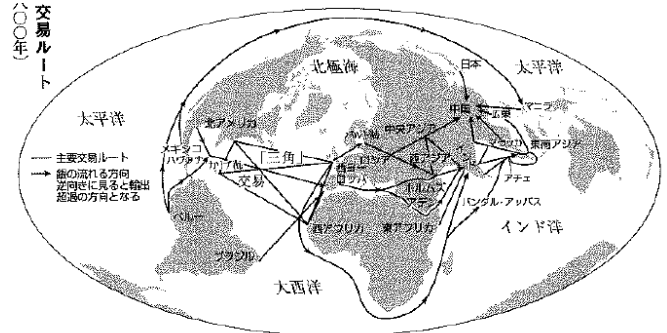
### 13世紀世界システム内の8つのサブシステム

水島司『グローバル・ヒストリー入門』山川出版社,2010,p.71



アブー・ルゴド(佐藤次高ほか訳)『ヨーロッパ覇権以前——もうひとつの世界システム』上 岩波書店 2001 43頁

### グローバルな交易ルート(14～19世紀)



フランク(山下龍久訳)『リオリエント——アジア時代のグローバル・エコノミー』藤原書店 2000 147頁

7

### \* ヨーロッパ諸国が外へ向かう動きを生み出した背景(11世紀頃～)

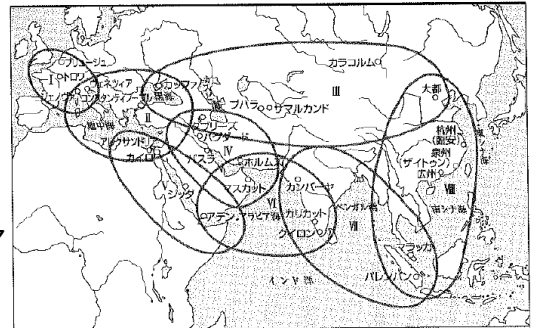
・「インド洋＝南シナ海世界の国際経済の衝撃が地中海におけるイタリア人の商業活動を生み、その力がイベリア二国を通して大西洋に噴出したのが大航海時代であると言ってまちがいないだろう。」[増田1998:29]

### ※東方貿易の活発化と衰退

- ・ 10・11世紀頃～地中海のイタリア商人による、イスラーム教徒との東方貿易が拡大(紅海ルートとペルシア湾ルート)
- ・ しかし1453年にビザンツ帝国が滅亡し、オスマン帝国が台頭  
→商業活動が停滞  
→イタリア商人は、新たな商業ルートの開拓を目指して西へ向かう

※その他の要因...航海技術の発展、都市・国家・個人間の競争心、西アフリカの金や香辛料(胡椒、シナモン、クローブ、ナツメグなど)への需要拡大、新世界への関心(マルコ・ポーロ『東方見聞録』)など

8



8

### \*イタリア人(とくにジェノヴァ商人)の大西洋への進出

- ・1291年ジェノヴァの商人ヴィヴァルディ兄弟

...ジブラルタル海峡を超えて西アフリカの沿岸航海→行方不明

- ・1312年ジェノヴァ人ランチェロット・マルチェロ

...西アフリカ航海でカナリア諸島に至る

### \*イタリア人によるポルトガル・スペインへの支援(のちにドイツ人やユダヤ人も支援)

- ・資本のほか、経営・商業技術も提供

...為替手形や信用状による支払い, 国際的銀行業務, 商業における合名会社, 組合の設立, 外貨交換システム, 海事保険, 簿記など

- ・ジェノヴァ・フィレンツェなどの商会在ポルトガルの海外進出を後押し

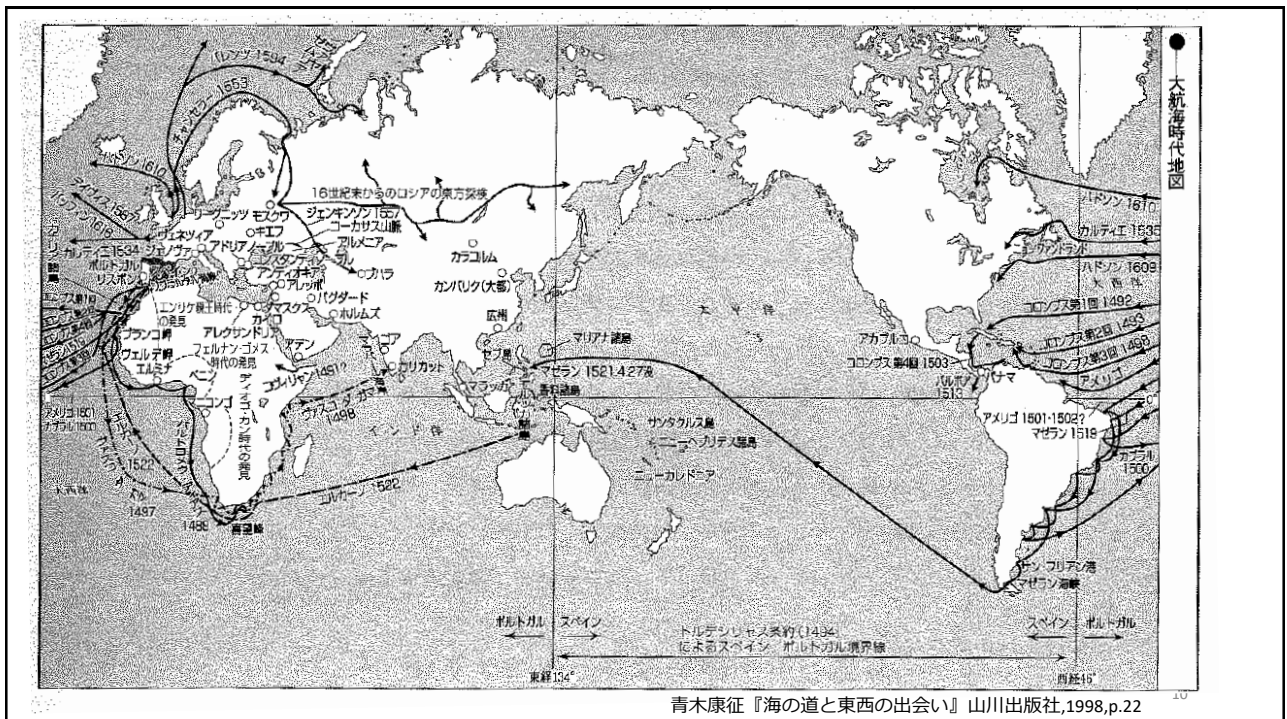
...造船、商船の航海、貿易などに資金・技術提供

- ・ジェノヴァ人コロンブスの資金調達にもジェノヴァ商人が一役買う

...ポルトガル王への売込み失敗→スペイン王へ

9

9



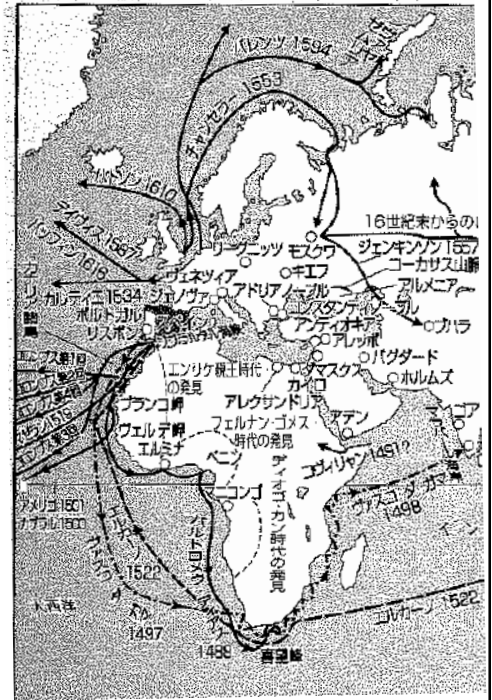
10

## ※ポルトガルの「海の帝国」

・1415年：セウタ(北アフリカ)をムスリムから奪う

...レコンキスタ(国土回復運動)の延長として  
...西アフリカ・スーダンの金やモロッコ沿岸の穀物資源を狙う意味も

・エンリケ航海王子・アフォンソ5世(在位1438-81「アフリカ王」)・ジョアン2世(在位1481-95)による西アフリカ航路の開拓



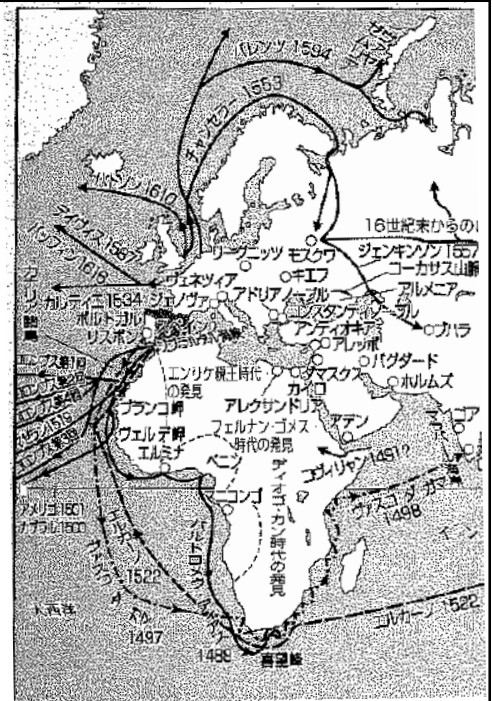
11

## ※西アフリカ航路の開拓の当初の目的

①西アフリカの有力商品(黄金、香料、象牙、奴隷など)の産地にムスリム商人を介さずに直接到達すること

②アフリカの奥地(エチオピア)にいと信じられていたキリスト教徒の王プレステ・ジョアン(プレスター・ジョン)を発見すること

※当初の遠征ではアジア進出まで考えられていなかったが、ジョアン2世の代になると、香辛料貿易のためインドを目指すようになる



12

## ・1488年：バルトロメウ＝ディアスがアフリカ南端に到達

...「カボ・トルメントーソ」(「嵐の岬」)と命名

→後に「カボ・デ・ボア・エスペランサ」(「喜望峰」)と改称

## ・1497年：ヴァスコ・ダ・ガマのインド航路開拓

...プレスター・ジョンとカリカット王に宛てたマヌエル1世の親書を携えて香辛料の交易地カリカットをめざす  
→1498年にカリカットに到達

※当時のカリカットの状況

- ・イスラーム通商圏の存在(アフリカ東岸～インド洋～東南アジア～中国)
- ・交易によって潤う豊かな港市国家(⇄ガマの小艦隊, みずぼらしい贈り物)



13

## ・1500年：カブラル艦隊のインド派遣

...ブラジルを「発見」し、カリカットに到達

...象をめぐるムスリム商人と争い、カリカットを砲撃

...利益は不十分

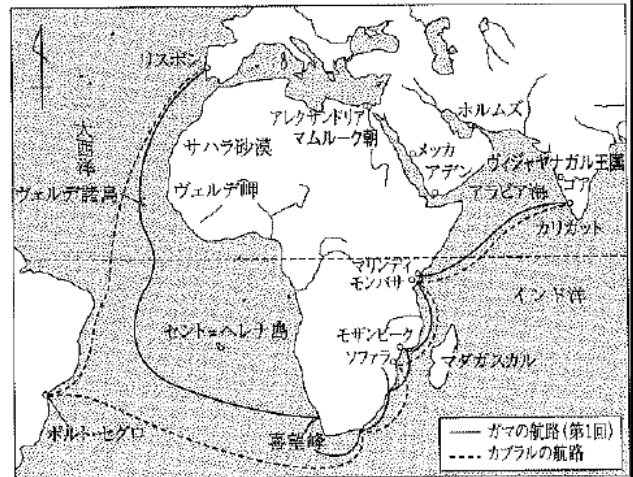
## ・1502年：ガマの第二回航海

...途中インド洋でメッカ巡礼船(240人? 380人?)を略奪・放火

...カブラル艦隊派遣時の賠償要求とムスリム追放要求

...ムスリム捕虜を処刑し、カリカットを砲撃

...コーチンやカンナノールで胡椒・香辛料を仕入れ、莫大な利益を上げる



ヴァスコ・ダ・ガマとカブラルの航路

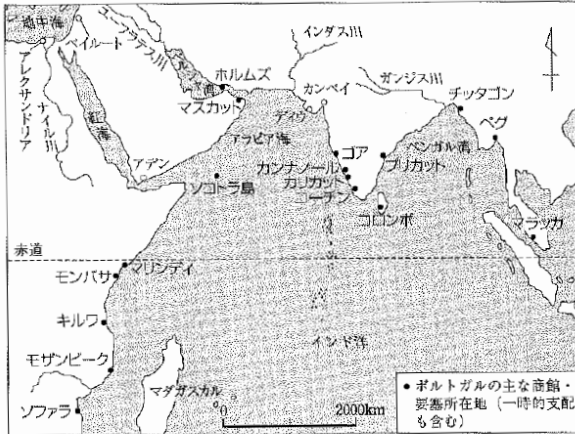
羽田正『東インド会社とアジアの海』講談社, 2007, pp.41

14

14

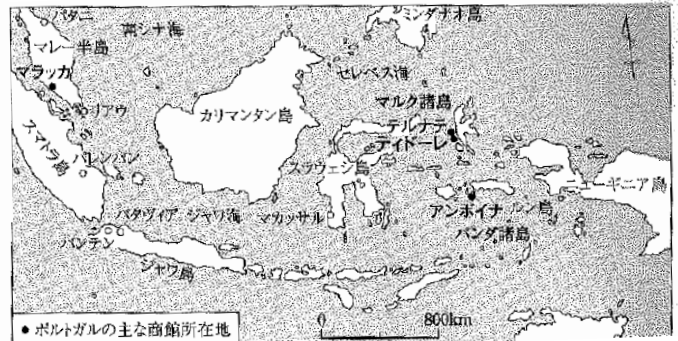


## \*ポルトガルの「海の帝国」(主な商館所在地)



※武装した艦隊により港町を征服し、要塞化された商館を置く

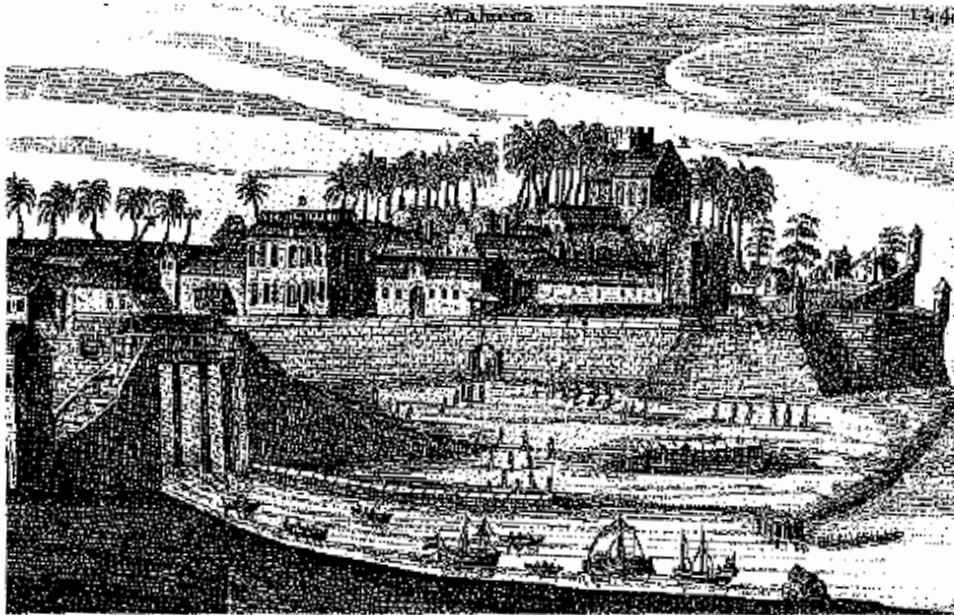
...ゴア(1510)・マラッカ(1511)武力占拠、マカオ居留(1557)、種子島漂着(1543)



羽田正『東インド会社とアジアの海』講談社,2007,pp.58,88

15

15



17世紀後半のマラッカ

16

16



## \*ポルトガルによる香辛料貿易の独占の試み：「海の帝国」

- ・カルタス(通行証)制度

...運航許可と関税により、東洋から本国まで海上交通を一貫化して独占  
(⇔従来の貿易：自由な航海と港の利用、東西貿易は地域ごとの分担)

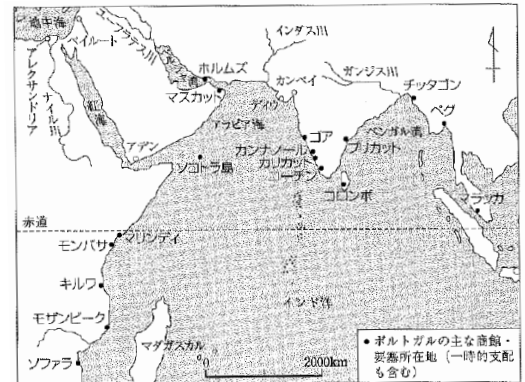
- ・しかし...香辛料貿易の独占は幻に終わる

### ※理由として

- ・アデン(アラビア半島)の非攻略

→ヴェネツィア経由(紅海ルート)による香辛料の流入

- ・要塞建設・維持のための資金の負担増
- ・ポルトガル人の私貿易の増加・規律の乱れ・現地化への傾斜→利益減



17

## \*オランダ東インド会社の成立

### ※16世紀中頃のオランダの状況

- ・神聖ローマ帝国(ハプスブルク家)による「低地諸州」(ネーデルランデン)※の支配

※現在のベルギー、オランダ、ルクセンブルクにほぼ相当

- ・1558年：神聖ローマ皇帝カール5世/スペイン王カルロス1世死去

→死去前、弟に神聖ローマ皇帝位を、長男にスペイン王位を委譲

(=スペイン国王フェリペ2世)

→低地諸州はスペイン帝国の領地となる



18

## オランダ独立戦争(80年戦争)の勃発と独立

### <背景>

スペイン国王フェリペ2世による圧政

...利益の搾取(フランドル地方の毛織物工業など)、低地諸州の貴族の蔑視、新教徒の弾圧

- ・ 1568年：北部7州を中心に反乱がおこる
- ・ 1581年：独立宣言
- ・ 1609年：事実上の独立(ネーデルランデン連邦共和国)
- ・ 1648年：ウェストファリア条約(三十年戦争の講和条約)により正式に独立承認

19

19

## \* オランダ東インド会社成立の背景

### <政治的要因>

- ・ スペインのポルトガル併合(1580)により、オランダ船はリスボンに寄港できなくなる  
→独自の貿易航路の開拓の必要

### <経済的要因>

- ・ 北部諸都市の発展(とくにアムステルダム)
- ...戦火・迫害を避けて人が集まる(スペイン・ポルトガルの宗教迫害を逃れたユダヤ人ら)
- ・ 水運の発達、毛織物工業の発達、新大陸の銀の流入  
→活発な商業活動・資本の蓄積

### <技術的要因>

- ・ 高い航海技術と情報(風車の技術を帆船に転用)、ポルトガル船員としての航海経験  
→航海に必要な高い技術と経験の蓄積

20

20

### \* オランダ東インド会社成立の経緯

- ・ 1596年：コルネリス=ド=ハウトマンが西ジャワ・バンテン港に到着  
→オランダ各地の港に航海会社が次々とつくられる
- ・ 1601年末までに15の船隊から成る65隻の船が東洋に来航  
→会社相互の競争が激化
- ・ 1602年：各州のいくつかの航海会社が合併し、「連合東インド会社」  
(Verenigde Oost-Indische Compagnie)を設立

21

21

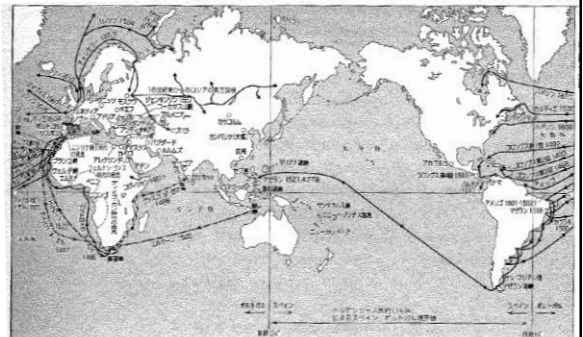
### \* オランダ東インド会社に与えられた特権

#### ※オランダ政府からの特許状(全46条)

- ・ 貿易・航行の独占、条約の締結、要塞の構築、貨幣の鑄造、兵力の保持と自衛戦争の遂行、長官・行政官および軍事指揮官の任命と罷免、裁判官の任命および罷免、刑罰の実施など  
= 準国家的な権限

#### ※権限の及ぶ範囲

「喜望峰の東からマゼラン海峡の西まで」



#### ※ただし、目的はあくまで貿易による利益獲得

→領土獲得や法の施行は必要最低

22

22

## ※オランダ東インド会社の組織と運営方法

### <組織>

#### ・オランダ本国

...6つの支部(カーメル:「部屋」の意味)

...定員60名の取締役会

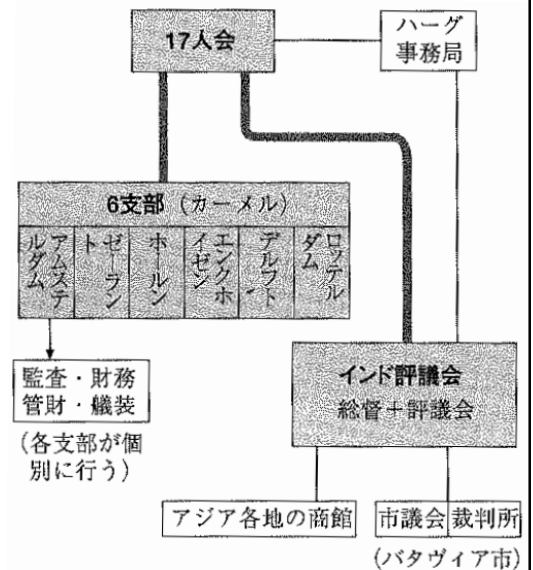
...「17人会」(最高重役会)

※資金調達、意思決定を行う

#### ・東インド(バタヴィア)

...「インド評議会」(「総督」と「評議会」)

※現地での交易・行政・司法、アジア各地の商館への指導・監督を行う



オランダ東インド会社の組織

羽田正『東インド会社とアジアの海』講談社,2007,pp.103

23

23

### <運営方法>

・正式な本社なし

・「17人会」(最高重役会)のメンバーは6つのカーメル(支部)から選出※

※アムステルダムの支部から8名、ゼーラントの支部から4名、残りの支部から各1名、さらに17番目のメンバーはアムステルダム以外の支部から輪番で1名を選出

・民間人による経営

(⇒スペイン・ポルトガル:王室の独占事業, 東インド会社: 政府が大量出資)

・資本は株主から10年間据え置きで調達

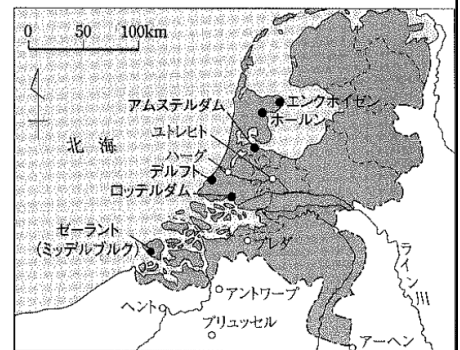
(=「世界初の株式会社」)

(⇒英東インド会社: 1航海毎に資金調達)

・運営は専制主義的

…経理非公開、恣意的な配当、取締役≠大株主、株主に投票権なし

(⇒英東インド会社)



支部名	資金の分配金額 (単位:ギルダー)	割合(%)
アムステルダム	3,674,915	57.2
ゼーラント	1,300,405	20.2
デルフト	469,400	7.3
ロッテルダム	173,000	2.7
ホルン	266,868	4.2
エンクホーゼン	540,000	8.4

オランダ東インド会社の6支部と分配金

羽田正『東インド会社とアジアの海』講談社,2007,pp.86

24

24

## \* オランダ東インド会社のアジア進出

※香辛料を求めてマルク(モルッカ)諸島(丁子/クローブ)・バンダ諸島(ニクズク)へ進出

・ポルトガルからアンボイナ島を強奪(1605)、イギリスからバンダ諸島を強奪・征服(1621)※

※800人近い原住民捕虜をジャワへ送り奴隷化。抵抗の首謀者47人を虐殺、逃げた成人160人を殺害。その後、自由市民・奴隷を送り込みニクズクを生産させる

・1619年：城塞都市バタヴィア建設(現在のジャカルタ)

→東インド貿易の拠点とする

・インド洋沿岸都市・平戸(1609)・台湾(1624)にも商館設置

・1641年にはポルトガルを追放し、マラッカにも商館設置

25

25

## \* オランダ東インド会社とイギリス東インド会社の対立

※「アンボイナ事件」(1623)

・オランダ人の要塞内のイギリス商館員によるオランダ襲撃計画(日本人傭兵を使つてのスパイ活動)が「発覚」

→拷問による自白にもとづき、英国人・日本人各10名、ポルトガル人1名の全員が死刑

・この事件を機に、  
イギリスは東インドから撤退  
→インド方面へ進出

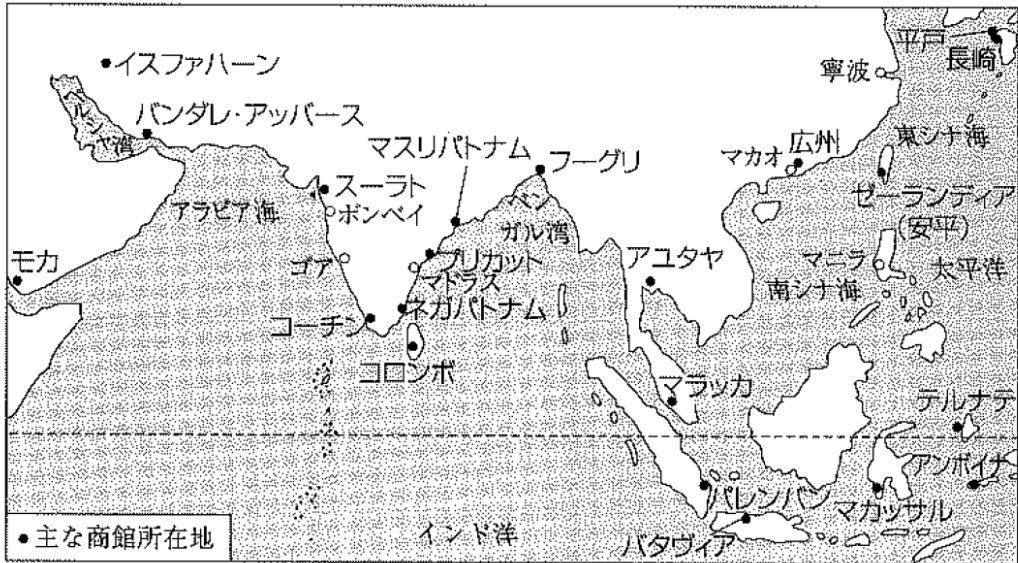


鶴見良行『マラッカ物語』時事通信社, 198,p.165

26



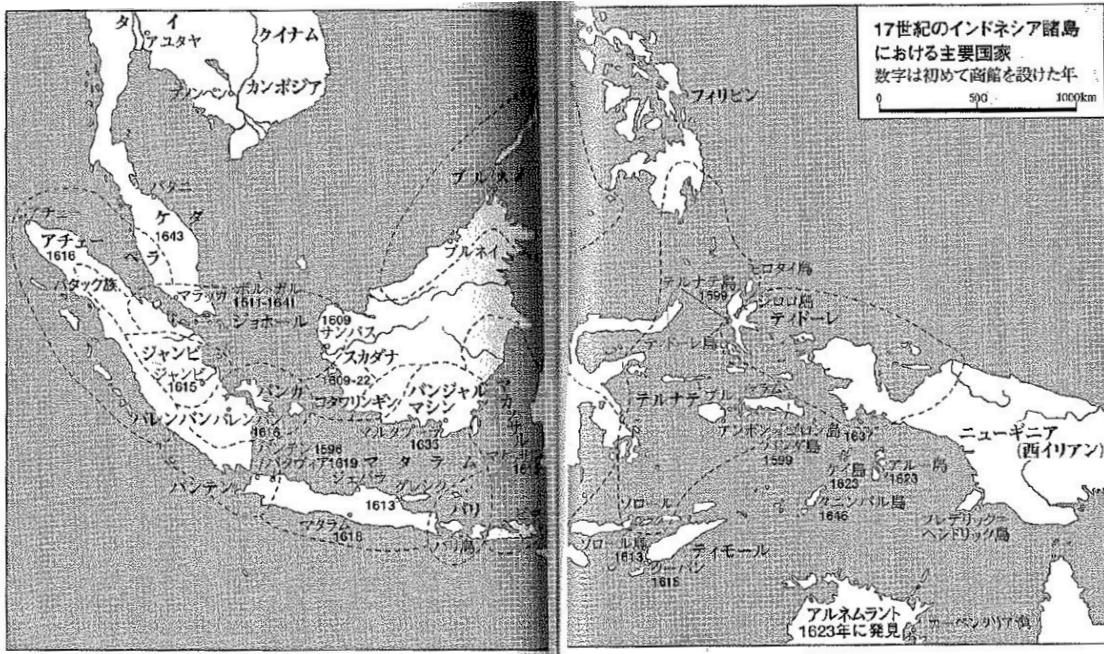
## オランダ東インド会社の主な商館所在地(17～18世紀)



羽田正『東インド会社とアジアの海』講談社, 2007, pp.94

27

27



永積昭『オランダ東インド会社』講談社, 2000, p.94

28

28



## 参考文献

- 青木康征『海の道と東西の出会い』山川出版社,1998
- 永積昭『オランダ東インド会社』講談社,2000
- 羽田正『東インド会社とアジアの海』(興亡の世界史15)講談社,2007
- 増田義朗「大航海時代の構図」亜細亜大学国際関係紀要, 1998,pp.5-38
- 増田義朗『大航海時代』(《ビジュアル版》世界の歴史13)講談社,1984
- 水島司『グローバル・ヒストリー入門』山川出版社,2010